世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

「仏教と環境危機」パネルディスカッション

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前岡, 慶映（編） メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1645

「仏教と環境危機」パネルディスカッション

英語・英米文学科　三年
仏教文化研究所　研修生
前岡　慶映（編）

本稿の概要

本稿は二〇〇八年一〇月二五日、武蔵野大学学園祭「摩耶祭」のイベントの一つとして開催された「仏教文化研究所特別公開講座『仏教と環境危機―私たちに何が出来るか』」での第二部パネルディスカッションを記録・編集したものである。内容は環境問題、特にCO_2排出と地球温暖化に焦点を当て、宗教団体としての寺の活動、環境の仏教的見方、対策の具体例、私たちの環境意識のあり方、今後の展望と、様々な話題が出てくる。

編集の方針として、実際行われた場の雰囲気を崩さないよう簡明さを重視し、また読み進めていく上であまり馴染みがないと思われる語に辞書説明等の注を加えた。

ケネス　「それではパネルディスカッションを始めたいと思います。大河内先生を含めた四人のパネリストを交えて話し合いたいと思います。このパネルの目的は大河内先生の話を聞いて、パネリストそれぞれの立場からどう思ったか、特に私たちに何が出来るかに焦点を当てて。そして第一部では仏教があまり出てこなかったので、補足していただければと思います。ではパネリストのご紹介に参ります。まず大河内秀人（ひでひと）先生。園部昌克（まさかつ）様。武蔵野大学三年生で仏教文化研究所研修生の前岡慶映（みちてる）君。そして環境学科の二年生、夏井志保（しほ）さん。まずは新しく加わった三名の方に自己紹介していただきましょう。」

夏井　「武蔵野大学環境学科環境アメニティ専攻二年の夏井志保です。日々環境問題のことや人口問題や、社会的な環境や科学的な環境等、様々な視点から環境についての勉強をしています。日ごろの考えを述べることが出来たら良いと思います。よろしくお願いします。」

園部　「はじめまして。園部と申します。千代田区で起業をしており、産業廃棄物の処理業と、研究所の活動で環境問題の対応策等を国に提案したり、コンサルティング関係の仕事をしています。また千代田区の環境事業でCES(千代田エコシステム)(1)があり、その関係で武蔵野大学の矢内秋生教授と知り合いました。そして武蔵野大学が共同でCESに取り組んでいるのをお手伝いしています。よろしくお願いします。」

前岡　「はじめまして。武蔵野大学文学部英語英米文学科三年、仏教文化研究所研究生の前岡慶映です。環

境問題についての知識は少ないですが、よろしくお願いします。」

ケネス　「このように学生と社会人が一緒に議論することはとても大切なことです。特に学生は将来環境問題に関して我々よりも影響する立場にありますので、こういう場を通じて更に意識を高めてもらいたいと思います。まずは大河内先生のご講演の印象や感想を三人のパネリストにお聞きしたいと思います。特に『私たちに何ができるか』ということを重点に話したいと思いますのでお願いします。」

夏井　「大河内先生のお話は、普段環境学科で学んでいることと、とても共通していると思いました。私が今まで学んできた中で、一番の問題と思うことは、エネルギー問題です。家庭から出るエネルギーよりも、産業からのエネルギーの方が圧倒的に大きいということが印象的でした。」

園部　「お寺というのは昔から学校であり、病院であったと思いますが、今のお寺はお墓しかなくて、冠婚葬祭事業団体化しているのではないかという印象を持っていましたが、大河内先生のようにご自分のお寺を使って、エコ運動など市民が共同で活動できる場所を提供していてとても感心しました。お寺は税金もかからないので、こうした活動をどんどん広げて、そして社会に広めていってほしいと思います。」

前岡　「私もエネルギー問題が印象に残りました。それとお寺は若者にとってはほとんど縁のない場所になっていると思いますので、寺の活動が一般の人々に知られることはとても良いことだと思いました。」

ケネス　「お寺と環境問題ということに関心があるようですので、それについて大河内先生にご意見を伺いたいと思います。先生のお寺だけではなく、日本全体のお寺は実際どれ程環境問題に貢献しているか、そして何をするべきかというところもお聞かせください。」

大河内　「お寺に税金はかからないと仰っていましたが、実はたくさん払っています。宗教関係、もちろん本堂やお墓にはかかりません。しかし、我々が活動している部分、例えば地域の人に開放して、活動して頂いたり、高齢者の住宅等、宗教関係のお寺としての以外の活動は課税されているのです。お寺が非課税なのは宗教活動の部分のみであって、お寺が社会活動をしたら課税されるのです。このことは皆さんに知ってほしいと思います。これは冗談ですけど事実でもあります。

それで、日本はお上、つまり体制にずっとぶら下がっている社会なのです。これからは、人々が自ら生活のために必要なものを、自分たちで社会事業化していくことが必要になります。NPO（2）がその役割になるでしょうけど、お寺も本来はそういう場所なのです。それを皆さんとまた作り直したいと考えています。私はパレスチナで十数年活動していますが、教会やモスクはやはりそういう場所なのです。それを地域の人々が皆で支えていく。そして困っている人々を支援したり、また将来の希望になるような活動をしています。これが宗教団体の本来の姿なのですが、現在の日本ではそれが課税される。お経を読んでいる分には非課税ですが、社会貢献をすると課税されてしまうのです。そこを何とかしたいと思っています。」

ケネス　「今のお話を聞きますと環境問題に関わると課税されてしまうということですか。宗教的活動として見られないのですか。」

大河内　「環境活動自体はそうは見られません。課税対象になります。」

ケネス　「パネリストの方々はお寺や仏教に何を期待していますか。コメントや質問等ありましたら。」

夏井　「社会貢献すると課税されるとのことですが、私は環境学科の環境プロジェクトとして、『大人の環境教育』というものを行っています。武蔵野大学の三鷹サテライト教室にて開催しましたが、例えばお寺でそのような活動をするとなるとやはり課税されてしまうものなのですか。」

大河内　「そうですね。要するに宗教活動以外のことにお寺を使うならば課税なのです。一般の人々から、お寺を貸してくれと言っても断られてしまうという話をよく聞きますが、お寺側もなかなかそういう場所を提供できないのです。ただ、そんなに厳密に調査されているわけではないので、少しくらいなら平気でしょう。」

前岡　「そうなるとあまりお寺側も積極的に社会活動が出来ないのではないでしょうか。」

大河内　「いや、多くのお寺は地域の人々に場所を開放すること自体はしています。ただ全く自由に開け放しではない、ということです。」

聴衆　「社会福祉法人(3)を設立するのが良いのではないでしょうか。」

大河内　「そうしているところもありますね。それぞれの目的に合わせて、社会福祉法人であったりNPOであっ

たり。私のお寺の場合は、法人化が煩雑なこともありますし、まだ確乎たるシステムや担い手となる人材が育っていないので、課税分を支払って活動しています。」

ケネス　「では仏教のことも絡めていきましょう。まず仏教の思想や世界観は環境とどのように繋がるのか。」

大河内　「基本的には仏教は『縁起』という相互依存の考え方があり、環境を考えるのに相応しい宗教です。我々と活動している一般の方々は、仏教徒ではありませんが、仏教的アプローチをしています。釈尊が説いた教えに『四諦』というものがあります。それは、苦諦、集諦、滅諦、道諦と苦しみの成り立ち、仕組みを非常に合理的に説いています。そして我々がどういう世界を作っていくべきか、という展望を与えてくれます。例えば地球温暖化という問題が起こっている時、まず一番苦しんでいるのはどういう人たちなのだろうかということを始めに考えます。彼らの苦しみの原因を感覚だけではなく、数字と理論をもって具体的に取り除く。それを形にするために、事業を行う上で、何を優先すべきかという方針になるのです。これがまさしく仏教的アプローチであると考えています。」

園部　「仏教のことは良く知らないのですが、考え方として同調できます。理路整然と順番を付けるのは大切です。本来環境問題は、基本的に循環可能な社会を作ることに焦点を当てていかなければならないのですが、どうしても入門として紙ごみ電気というようなところから始めさせてしまう。そこに環境問題を実際に考える人間はジレンマを感じてしまいます。マスコミなどがコマーシャルしやすい話題

として取り上げているので、環境問題＝ゴミ・電気・CO_2と考える方が多いので、正しい環境問題を提案していただければとの思いがあります。せっかくですからここにいる皆さん全員が参加して、問題に取り組みましょう。皆さんは何かご自分がされている活動などはありますか。」

ケネス　「ではご意見ある方はお聞かせください。」

聴衆　「大河内先生にお聞きしたいのですが、仏教における環境とは何でしょうか。」

大河内　「私自身はNGO（4）で中東に行ったりした中で、本当に苦しんでいる、日本では体験されることのないような苦しい目に遭っている人々が大勢いるのを見ました。その中で、釈尊の四門出遊の話であったり、法然が比叡山で求道をしたという話。そういうことが少しは実感としてわかったような気がします。

環境というのは掴みどころがありません。仏教において環境とは『いのち』ですね。ではそのいのちを生かしているものは何でしょうか。それを説き明かしたのが仏教であり、他の宗教でもいのちの正体を見極め、その中からいかに自分の生活の在り方を見出していくのか。これが宗教の根底にあると思います。」

聴衆　「環境学科の方にお聞きします。仏教系の大学としての武蔵野大学で環境を勉強なさる中で、仏教の

思想を環境に活かすような学びはあるのでしょうか。」

夏井　「授業としては一年生の時に必修教科として仏教を学ぶだけですね。環境の中心にあるものはいのちです。いのちを脅かすものとして環境問題があり、また仏教では脅かされたいのちの苦しみ原因を突き止め、これを除去しようとします。同じいのちというものを考えるときに接点があるのだと思います。」

園部　「僕は環境を勉強したときに、環境の定義として『囲い』というのがありました。つまり環境とは『範囲』であり、広い意味での環境も、個人個人の『範囲』から出来上がっているということと思います。その意味では環境という言葉の独り歩きはない。『何か』の環境である。だから『範囲』なんだと。そういう中で勉強していた僕には、環境は『いのち』であるという全体を捉えている発想はありませんでした。」

ケネス　「仏教では『少欲知足』(5)という考え方があります。これは仏教と環境の接点となる考え方だと思います。園部さんのご質問は、個人がされている環境活動ということでした。これについて何かお聞かせください。」

聴衆　「個人的には電気をこまめに消したり、マイバッグ等、メディアで言われているようなことを心がけています。家庭内からのCO_2排出は産業と比べたら微々たるものとのお話でした。私たちは努力し

ている人もいますが、そうした人の身近にいる人、家族にも環境問題に無関心な人々がいます。感心はしても行動には移してくれない。私としては彼らに行動してほしいと思います。でも強制するのは嫌ですし、正しくないとも思います。仏教の視点からは、強制ではなく平和的な活動のイメージが感じられます。その視点から、周りにどのように影響を与えていけるのか。それと産業面でCO_2を削減する方法を、私たち個人がどのように働きかけ、今何が出来るのかをお聞かせ頂きたいと思います。」

ケネス園部「産業は個人の問題ではなく政治的な話もありますね。」

「環境の問題で言うと、ISO14000（6）では環境問題は強制ではないのです。これをやりなさい、とかではなくて、自主的な参加が本来的なのです。しかし、現状ではその自主的な参加を待っているだけでは間に合わなくなっています。そこでCO_2排出規定など、法による規制の提案が実際に出てきています。僕は、『法は徳の最低限』と考えていまして、まず個人で自主的な規制をして、その後に法律を作りましょうというのが民主国家のあり方だと思うのです。国が何もかも規定することは、民主国家のあり方ではないのです。そう考えると、個人の考え方は自主性が第一にあるべきですね。個人の意思の下に法がなくてはならない。先進国として、他国の見本になるべき日本が、法の下に個人がある中で発展するというのは考えたくありませんね。

そして産業面に対する働きかけで『CSR』（7）がありまして、大企業が社会貢献的な形で発表していて、環境を一緒に入れていますね。ただ考え方を変えれば、産業面で働いているのは我々です。一

人一人が企業で働いていますね。政治も同じです。政治に票を入れるのは我々です。だから自分たちで変えようと思えばどうにでも変えられることが有り得るのではないでしょうか。そうした運動を大河内先生は出来る範囲でやっていらっしゃる。僕も出来る範囲で色々やっている。だから、誰かがどうにかしてくれるだろうなんて考え方はもう止めて、一人でもいいから声を出して『社会を良い方向に変えましょう』と呼びかけることが、これからの一つの大事な法則になると思います。」

大河内「仏教には仏法僧の三宝があります。仏とはこの場合環境、いのちですね。それを尊ぶ教えとして法があり、これを守り、従って生きて行きます。僧が我々のことです。しかし仏教には末法思想という時代認識があります。これは正法、像法、末法の三法から成り立っていて、末法は仏の教えである『法』が失われてしまった悪い時代のことです。そして今の時代が末法と言われるのです。それを念頭に二つ意見を述べさせて頂きます。

まず園部さんが仰った『自主的』ということなのですけれども、私これには反対なのです。もちろん自主的は美しいのですが、仰るとおりそれではこの危機的な地球環境は守れない。CSRなども少し景気が悪くなると途端に目標が落ちるんですね。それではいけない。これを実行するのはバランスを考えなければいけないのですけれども、『トップランナー方式』(8)というものがあります。例えば先ほどの講演で、火力発電には効率が良いのと悪いものがあると申しました。だからその効率の良いところを基準にする。そしてそれに追いつかないものに対しては罰則、課税をしていく。つまり出

来ないのだから仕方ないではなく、出来ているところに近づいていく、それが政策なのです。確かに我々国民が企業の一人一人ではありますが、やはり一方では生活者なのです。企業の立場だけから考えると先ほど申し上げたように、業績が悪化すると環境どころではない、となってしまうのです。ですから企業ではなく、人間としての立場から環境を考える。そういう知識をしっかり持ち、その上で企業や政治にどういうことをさせるかを決定する。その智恵を働かせることはいくらでも出来ます。日本やアメリカでは企業の力が強いです。そして市民が弱い。反対にヨーロッパでは市民が強いです。この違いを我々はしたたかに活かしましょう。技術的にも可能なのですから。

それからやはり出来る人、意識の高い人が活動することは重要なのですが、仏教の話に戻りますと、批判覚悟で申しますが、日本の仏教ははっきり言ってダメです。日本にはお寺が一〇万以上あり、ものすごい行動力を起こすこともできますが、日本では仏教が社会に参加することに積極的ではありません。なぜこんなに多いのかというと、それは日本人が信心深いからではなく、江戸時代に作られた檀家制度というシステムがあったからです。つまり意識ではなく、仕組みにしないとやはり社会では存続できない。意識だけに頼ってはいけません。だから意識の高いところ、トップランナーの意識に皆が合わせるシステムを作ることが、これから私たちが取り組んでいくやり方であると思います。」

ケネス「新しい仕組みはどのような展望ですか。今の仕組みが適していなければどういう仕組みが必要でしょうか。」

大河内　「トップランナー方式もそうですし、二酸化炭素の排出権もそうです。二酸化炭素を出しすぎた企業からお金をもらって、そのお金を二酸化炭素を出さない仕組み作りに回していく。そうした良い循環を国民が選べるように、情報を正しく出して、伝えていかないといけません。ただ日本のメディアは、国策事業や大企業に弱く、不都合なことが言えないので、私たちが正しい情報、事実をどう共有するかも考えないといけませんね。

それと私は仏教徒として言えば、どんなものにも仏性があり、誰でも人と仲良くしたい、幸せになりたい、平和に暮らしたいという考えを本質的に持っていると思っています。だから正しい知識がしっかり伝われば、人間は正しい選択をし、正しい行いが出来るんだ、そういう能力があるんだ、というのを信じることが仏教の思想だと思っています。」

ケネス　「本日は副題で『私たちに何が出来るか』とあります。私見ですが武蔵野大学の学生を見ていると、一部を除いて環境に対する危機感が感じられません。例えばマイ箸を持っていないとか。学生パネリストの方々は同じ学生としてどうでしょうか。何かお聞かせください。」

前岡　「学生の環境に対する意識はあまり無いと思います。この会場にも学生はほとんど居ません。

本学は行政からCO_2の排出量が多すぎるため、削減するようにと注意を受けました(9)。そして今年の四月から一〇月までのCO_2削減のための活動と結果を公表しました。それを見ると、去年の同時期と比べて約三・五パーセント減少したそうです。これを量に直すと約八〇トンです。八〇トンと

言いますと量的にはかなり削減したのかなと思いますが、比率から見れば、三・五パーセントは大河内先生が講演で仰ったような、エアコンを高効率のものに変えるだけで簡単に達成できるような数値です(10)。大学が導入した具体的なシステムは、例えば休み期間中は、二つ動いているエレベータを一つにしたり、電気にタイマーを設定して夜二一時以降は消灯したりとあったようです。ただ実感として、僕が夏休み中に大学へ来たとき、建物に入ると寒いくらい冷房が効いていたこともありました。

僕の提案したいことは実は意識面なのです。皆さんが仰ったように、システムを変えることが一番効率的ではありますが、僕としてはやはりこれから社会で長く活躍する学生たちの意識を環境に向けさせるように大学が何か出来ないかと思うのです。例えばこういったパネルディスカッションを授業の一環、学生主体で企画するとか、公開講座をもっと宣伝、時間調整なんかをして学生をもっと集めるとか。『考える場所』を用意することが重要だと思います。

人間は仏性を持っているという考えに近いですが、誰だって好きで環境破壊をしようなどとは思わないですよね。しかしやはり生きている以上損得勘定でものを考えてしまいます。だから環境問題を意識したとしても、それは自分の損にならないかという考えを第一に置いてしまっている。先ほど家族や身近な人がなかなか協力してくれないという意見がありましたが、意識のある人が周りに強制をしないで影響を与えるには、自分が行動し続けて、他人に示し続けていくしかないと思います。自分はこれだけやっているなどと傲慢になってはいけない。そうすればきっと僅かでも影響を与え続けることはできると思います。」

夏井　「私は電力からCO_2を削減することを提案します。電源を消すことやコンセントを抜く。エアコンの温度設定をする。でもこれだけではダメだと思います。例えば大きい教室の中で、少ない人数で授業をする場合など、中央制御装置で温度設定がされている時は寒い場合があります。逆の場合でも暑いと感じることがあります。無駄な電気を使わないことは重要ですが、無駄ではない電気は使っても良いと思います。我慢は必要ありません。だから何パーセント削減を目指すという時に、スイッチや温度設定をするだけではなくて、根本的な電力の使い方というのを見直していったら良いのではないかと思います。

東京電力でもやっていますが、『グリーン電力購入法』というものがあります。企業・個人が電力を使う際にどのような電力を使うかを選び、購入する方法です。それを大学でも導入すれば良いと思います。『グリーン電力購入法』とは、『グリーン証書』という証書を買うことによって、火力発電や原子力発電ではなく、水力発電や風力発電のクリーンな電力を間接的に買えるというシステムです。それを導入し、電力を百万キロワット購入するとなると、CO_2の削減の効果は三九〇トンになります。同じ電力使用量でもCO_2の排出量は全く違う結果になります。だから節電と同時にこのシステムを導入すれば、これまでよりも大幅な削減効果が期待できます。従って私はこれを提案したいと思います。」

園部　「私が学生さんに期待することとしては、例えば武蔵野大学の学生さんたちが近くのコンビニやスー

パーを回って、レジ袋を断れば、二円でも三円でも良いから値引きしてくれるようにというような現実的な運動をしていって欲しいです。

私が予測する将来としては、化石燃料の問題はそれ以外の発電方法で対応できるようになると思います。石油問題に取って代わることになるものは、水資源に関する問題だと思っています。なぜかというと、麦一トンを作るために水が二〇〇〇トン必要なのです。これから農業をやっていこうとか、地産地消(11)とか言われていますけれど。あまり知られていませんが、中国は水不足がはっきりしているので、ダムを作って水不足を解消しようということが国策になっています。日本も環境問題イコール水不足の図式が始まってくると、農業推進どころか農業自体が出来なくなってきます。だから家庭では電気の使い方だけではなく、水の使い方も意識していって欲しいと思います。」

大河内「まずは無駄を省くことですね。エアコンの温度設定を例に挙げれば、私たちがエアコンを付けるのは、空気の温度を上げ下げしたいわけではなくて、快適に過ごしたいからですよね。だから決してエアコンだけが空気環境を整える装置ではないので、色々工夫があります。学生さんたちがこれから社会人になって、家庭を持つことにもなると思います。そうした工夫を皆で色々と研究したり、またアピールする活動をしていって欲しいです。数字を下げるのは『意識』よりも『知識』です。意識は色々な条件下で付随するものだと思いますが、ただ知識は求めないと付いてきませんし、そこから色々な可能性がまた広がっていくと思います。

水も重要ですね。グローバル社会の中で同じ作物を食べるとき、地産地消のものか、それとも海外から輸入するかはエネルギー消費が全然違いますよね。仏教では、自分の食べているものがどういう由来のものか把握しようとする行いが食前にあります。それと同じようにフードマイレージ(12)という言葉もありますが、自分たちの周りのものを深く掘り下げて理解して欲しいと思います。」

ケネス「ありがとうございました。今日は大河内先生から多くの知識が聞けたと思います。学生たちや皆さん、我々自身もですが、こうした機会を通して知識を増やして、意識だけではなく『意欲』をもっと育てて欲しいと思います。うちの大学でも環境学科が活動を始めていますし、学校全体もそうです。仏教文化研究所からももっと意欲的に活動していこうと思っています。今日は社会人の先生方と学生さんが加わって有意義な時間を持つことができました。今日いらしてくれた方々も我々と今日学んだことを実践して我々皆で協力していきましょう。以上で本日のシンポジウムを終えたいと思います。今日はどうもありがとうございました。」

出演者プロフィール

ケネス田中（武蔵野大学政治経済学部政治経済学科教授、仏教文化研究所所長）

大河内秀人（浄土宗見樹院、浄土宗寿光院住職　中東、東アジアでの支援事業、寺院と地域住民の連携など、

多方面での社会活動を行っている。）

園部昌克　（（株）日本環境保全研究所　代表取締役）
夏井志保　（武蔵野大学人間関係学部環境学科環境アメニティ専攻二年生）
前岡慶映　（同文学部英語・英米文学科三年生、仏教文化研究所研修生）

注

1　CES(Chiyoda Eco System) とは、千代田区が独自につくった環境配慮行動のしくみのこと。このシステムは個人での活動や ISO14001 に比べて、その取得と維持にかかる事務手続きや経費を大幅に簡素化・削減したもの。
CES 推進協議会ホームページより (http://www.chiyoda-ces.jp/)

2　エヌピーオー【NPO】デジタル大辞泉
《non-profit organization》民間非営利団体。政府や企業などではできない社会的な問題に、非営利で取り組む民間団体。

3　社会福祉法人　現代用語の基礎知識
社会福祉法に基づき社会福祉事業を行うことを目的として設立された法人をいう。社会福祉事業の中心的な担い手として近年の新たな福祉ニーズの出現、福祉サービス提供主体の多元化により、「自立・自律」と「責

任」を重視した経営のための社会福祉法人のあり方が考えられている。

4　エヌジーオー【NGO】デジタル大辞泉

《nongovernmental organization》非政府組織。平和・人権問題などで国際的な活動を行っている非営利の民間協力組織。

5　少欲知足　仏教語大辞典

欲が少なくてわずかなもので満足していること。どんなわずかなものにも満足すること。

6　ISO14000　日本大百科全書

環境に配慮した企業を認定するための環境マネジメントシステムや環境監査、環境ラベルなどの指針、手順、手法、基準などを定めた国際規格で、規格番号から14000シリーズとよばれる。ISO（International Organization for Standardization＝国際標準化機構、本部ジュネーブ）は、国際間の産業活動や流通を円滑にするための国際規格を定める機関である。14000シリーズのうち、14001が環境マネジメントシステムの規格である。環境マネジメントとは企業が環境に関する方針を定め、情報を公開しながらその目標を達成しようというもので、審査は企業が自主的に独立の公認機関に依頼し、ISOが承認した機関がこれを認定する。

7　CSR　現代用語の基礎知識

企業活動を社会的公正性や環境保全等の観点から制御し、利益の追求だけではなく、さまざまな社会的な側面（法令の順守、人権擁護、労働環境、消費者保護など）、環境的な側面においても成果を高め、従業員や顧客等、会社に関係する人全てに対して責任を果たすべきだとする理念。

8　トップランナー方式　デジタル大辞泉
省エネルギーなどの基準を、現在もっともすぐれている数値に合わせる方式。

9　武蔵野大学のCO_2排出量は原油換算で二二〇〇キロリットルに相当し、際立って多い事業所として東京都から優先して取り組みを行う事業所に認定され、対策を行っている。詳細は武蔵野大学ホームページ「本学院の地球温暖化に対する本格的取り組みについて」(http://www.musashino-u.ac.jp/ao_general/organization/mg_news/img_ph/ondanka_torikumi.pdf)

10　本稿の前半に行われた大河内氏の講演によれば、家庭の総消費エネルギーの約一〇パーセントがエアコンであり、エアコンは一〇年前のものに比べエネルギー消費率が半減しているという。「地球温暖化対策（中間）報告」(http://www.musashino-u.ac.jp/ao_general/organization/mg_news/08_10_30.html)

11　ちさんちしょう【地産地消】　デジタル大辞泉
《「地域生産地域消費」などの略》その地域で作られた農産物・水産物を、その地域で消費すること。輸送費用を抑え、フードマイレージ削減や、地域の食材・食文化への理解促進（食育）、地域経済活性化、食料自給率のアップなどにつながるものと期待されている。

12　フードマイレージ (food mileage)　日本大百科全書
食料を輸入してから、消費者の口に入るまでに、食料がどれくらいの距離を運ばれてきたのかを数字で表したもの。
農林水産省の試算によると、わが国の総フードマイレージは、約五〇〇〇億トン、一人当たりは、

三九五五トンになっている（二〇〇〇年）。韓国は一五〇〇億トン、アメリカは一四〇〇億トンキロであり、日本は韓国の三・三倍、アメリカの三・六倍である。このようになるのは、わが国で大量に消費される大豆や小麦などが、おもに距離が比較的離れているアメリカなどの諸外国から多く輸入されている結果である。輸送に要するエネルギーは距離だけでなく、輸送手段（飛行機か船かなど）にも左右されるが、環境への配慮から、輸入食料への依存度が高い現状を見直すことが必要である。